



筑紫女学園大学リポジット

An Introduction to Minamata Studies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 正純, HARADA, Masazumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/102

【公開講演会報告】

水俣学のとびら

原 田 正 純 （前 熊本学園大学教授）

An Introduction to Minamata Studies

Masazumi HARADA (a former professor at Kumamoto Gakuen University)

〔本公開講演会について〕

この公開講演会は、平成23（2011）年6月25日14時からの2時間を使い、標記の題で福岡市天神のエルガーラ多目的ホールで実施したものである。

〔司会〕 こんにちは。筑紫女学園大学短期大学部現代教養学科の速水といいます。遠くは長崎や、熊本の阿蘇からご参加をいただいております。多くの方においでいただき、ありがとうございます。原田先生をご紹介する前に、少しこの講演会を計画したいきさつをお話ししたいと思います。

この講演会のチラシには、たまたまですけど、福島原発事故のことですが、「巨大企業が環境破壊と損害賠償の問題を起こしている今だからこそ、同じような特徴を持っている水俣病を考えてみよう」ということを書いています。偶然なことにチッソも、創業時の、戦前ですが、経営の一部として、鹿児島県とか、あるいは、韓国で、水力発電事業、電気事業をやっております。それは偶然ですけども、ここに書きましたことはそれ以外の、いわゆる加害企業、そして、被災者、そして、国という、この災害の構図が非常に水俣病のときと同じ、似ているということを書いたものです。しかし、この講演会というのは昨年の11月に計画しましたので、もともとそういうふうには、この震災の影響と水俣病を比較するために計画したものではありません。この講演の計画にあたって特に強調したかったことは、水俣病という言葉が、たぶん50年、60年ぐらいたっているわけですけども、水俣以外の地に住んでいる一般の市民にとっては、特定の被害者の裁判の一つでしかないと、そういうふうにとられているんじゃないかなと思います。

しかしながら、これ水俣病の歴史をよく調べてみる、あるいは、勉強してみると、日本人の誰もが深い関係を持っているということが分かると思います。例えば、第二次大戦後の復興期に、

いわゆる朝鮮戦争の特需景気のときに、新日本窒素肥料株式会社水俣工場が、アセトアルデヒドの生産量を飛躍的に伸ばしました。そして、同時期に触媒の使い方を変えました。そのことが生産過程でのメチル水銀の大量発生を伴って、そして、患者の大量発生につながっています。それと同時にその時期から、日本に限りませんが、いわゆる大量生産、大量消費、大量廃棄という、現在の環境問題の発生要因を含んだ社会につながっているということが分かります。そして、先ほどアセトアルデヒドと申しましたけれども、このアセトアルデヒドという物質は、われわれが普段に使っている、例えば、こういう机とか、壁とか、天井、あるいは、いろんなところで使っているプラスチックの原料です。したがって、そのことを考えると、日本人誰もがプラスチックの恩恵をその当時から、50年、60年前から恩恵を被っているわけですから、そのことを考えると、われわれ誰でもが水俣病ということをしっかり押さえておく必要があるという、このことが、この講演会を企画するにあたって特に強調したかったことです。

その他にも、ご参加いただいている皆さん方には、水俣病ということに関して、何かそれぞれの思いがおりになるだろうと思いますけれども、ここでは、私の場合に限って2つ申し上げたいと思います。一つは、筑紫女学園と水俣病の関係、ちょっと大げさな言い方かもしれませんが、今から20年ぐらい前です。筑紫女学園には、今は幼児教育科とか心理学科の中に、保育士課程というのがあります。しかしながら、幼稚園と保育園というのは、今でこそ対等なイメージがありますけれども、20年、30年前は、幼稚園は子どもに勉強させる場所、保育園はいわゆる託児所的な、そういうイメージでした。だから、少し保育園の方が低く見られていました。筑紫女学園は、かなり前から幼児教育をやっていたので、取りあえず幼稚園の先生の免許だけは与える、そういう幼稚園教諭の課程を持っており、それだけでじゅうぶん学生が来ていましたので、保育園の保育士の課程は無かったんですよ。そうこうしている内に、だんだん、九州の他の短大、大学は幼稚園免許、保育士免許、両方出せるようになりましたけど、うちと、もう一つぐらいが、九州の中では保育士課程がなかったんですよね。それに気がついて、気がつくというのは前から分かっていたことですが、何とかした方がいいっていうことで動き出したころには既に少子化が始まっていまして、なかなか保育士課程の認可をもらうのが難しい時期になっていました。それで、幼児教育科の岩山先生、そして私が所属していました家政科の山本先生が相談しまして、山本先生の先輩が元厚生省の役人だということで東京までお願いに上がりました。それが功を奏したのか、次の年にうまく保育士課程の免許がもらえたんですね。

水俣病の歴史について詳しい方はご存じだと思いますけども、1990年の12月に、環境庁の企画調整局長が自殺なさいました。自殺なさった山内豊徳さんっていう方は、福岡の修猷館高校の卒業なんですけども、うちの教員がお願いに上がった元厚生相の役人っていうのは、その山内さんです。亡くなったときは、環境庁でした。ちょうど1990年にいろんな裁判所で、裁判を続けるんじゃないくて、もう和解をなさいという和解勧告が出されて、それに従って熊本県と、チッソは、その和解を受け入れようという方向になったんですが、国は受け入れないということになって、山内さんは患者を拒否するという立場の、ちょうど交渉役だったんですね。人間として患者

のことがじゅうぶん分かるけども、役人の立場としてはそれを拒否しないとイケない。そういう板挟みになって自殺なさったということなんですが。先ほど申しましたように、保育士課程の認可の件でお世話になったってことが、私ずうっとそのことが頭に残ってて、この講演会を計画しようという、私自身の気持ちの一つの表れでもあります。

もう一つ、私の大学時代の親友なんですけども、今どきそういう学生はあまりいませんが、かなりお金に困っていたので、それで1年間休学して釜ヶ崎、いわゆるドヤ街ですけども、そういったとこに1年間休学して、その後の何年か分かの学費と生活費を稼ぎに行ったんですね。そういう親友がおりました。その親友と話をしていると、自分は華北郡津奈木町の出身で、父親が水俣病だと言っていました。その親友から、大学の勉強のこととか、人生についていろいろ教えてもらった、そういう親友なんですけど、三十代そこそこで亡くなってしまいました。そういった個人的なこともありまして、この講演会をぜひ企画したいというふうに思った次第です。長くなりましたけれども、最初に申しましたように、プラスチックを利用している日本人われわれにとっては、水俣病っていうのがプラスチックの原料であるアセトアルデヒドを作る工場で発生している、その関係がある限りは、水俣病はしっかり学んで、今後の自分たちの生活に活かしておく必要があると思います。

それでは、長くなりましたけど、医師として水俣病の発生当時から患者に関わられて、胎児性水俣病ということ、それまで分かっていなかったそういう症状を発見なさった原田先生。その後、熊本学園大学に移られて、今日もお話しいただく水俣学を開講されていらっしゃいます。その原田先生のお話をお聞きしたいと思います。いろいろな業績がたくさんございます。いろんなところでお目にされていると思いますので詳しくご紹介しませんが、いろんな賞を、大佛次郎賞とか、吉川英治文化賞なども受賞なさっています。去年は、朝日賞を受賞なさっています。現在は熊本学園大学の水俣学の研究センターの顧問という仕事でいろいろ活動なさっていますが、日常生活の面で、私いろいろ講演の企画で電話を掛けるときに、お孫さんの散歩で出かけていらっしゃるとか、そういう家庭的なこともいろいろなさっているようです。それから、きょう来ていただいたのも非常にご無理なさっていらっしゃると思います。ご自分も水俣病のそういう仕事の他に病気を抱えていらっしゃいますので、今後ともご健康で、いろんなところで講演活動をなさってほしいと思っています。それでは、原田先生、「水俣学のとびら」を開いていただきますよう、お願いします。

もう一つありますけど、いろんな方がぜひこの機会に写真を撮影して、最近インターネットとかでブログとかあります。そういったとこで使わせてほしいという申し出がありますけども、今回の講演の中ではいろんな患者さんの写真が出てきます。そういったものが公表されるのは非常に好ましくないんで、個人情報としてですね。それで、最初のこの状態だったら、今からライト消しますから、この「水俣学のとびら」っていうところだけでしたら問題ありませんので、その段階で写真を撮っていただきますように、よろしくご協力お願いします。

原田 どうも、紹介いただきましてありがとうございます、原田です。私、医者になって、ちょ

うど半世紀をちょっと超すんですが、51年になりますか。だから、水俣病との付き合いも50何年になるわけで。だんだん研究者としてよりも、証言者っていうんですかね。あのころこうだったよって、だんだん昔のことが話せる人がいなくなっちゃったですね。だから、そういう意味で、私、命ある限り証言をし続けなきゃいけないかなというふうに思ってるのが、ひとつあります。

それと、最近ご承知のように震災がありまして、そして、いろんなマスコミが問い合わせで来ます。現にいくつか新聞やテレビに私出たことあるんですけど。水俣と今度の震災とは、もちろん共通点も大きいんですね。だけど、非常にマスコミ的には、水俣やってるから今度の震災とどうですかみたいな、非常に安易につけた質問っていうのもかなりあるんですね。だからその、震災と水俣病っていうのは共通点ものすごく大きいんですけども大変違うところもあって、それを一緒にくたにして論じられない部分があるんで、それがここ2〜3カ月なんかマスコミにごちゃごちゃされたところなんですけど。いずれにしても、人間が作ったものが自分たちの社会や健康を破壊していたという点では同じ。あるいは、私たちが便利さを求めて、その便利さを求める余り、プラスの面ばかり考えて、マイナスのところを無視してきちゃったと。物事には必ずプラスがあればマイナスもあるんだということ、それはあまりにもプラスの面だけを強調し、そっちだけを追求していくためにとんでもないしっぺ返しを食ったという、今度の犠牲の方はもちろんですけども、私たち自身が考えなきゃいかんことじゃないかなと思って水俣の話をしたと思うんですけど。今回は、原発の話は、私は専門家ではないもんですから、水俣を中心に話をして、それで、皆さんの頭の中で、今日起こっていることと比較をして考えていただければ、私ここに来てしゃべる価値があったかなというふうに思います。

じゃあ、スライドをよろしくをお願いします。最初に申し上げたように、たくさんの方が亡くなられたんで、亡くなられた方に対して、まず心から哀悼の気持ちを差し上げたいと思います。私は、今回の災害は、最初は天災の部分が大さいと思っていたんですけど、だんだん事件が明らかになってくると天災だけではない、特に原発の問題は人災そのものですけども、そういうことであるし、それから、科学者たちが、専門家が出てきて、予想外だったって、よくテレビで言うんですけど、私は非常に何か腹が立つというんですかね。想定外っていうことは、じゃあ科学者じゃなかったのかなという気がするわけですね。あらゆることを考えていくというのが、科学のそもそもの立場になるわけで、私たちの都合のいいことだけを考えていくのが科学ではないわけで、当然科学にはプラスの面とマイナス、さっき申し上げたように両方あったわけで、それを両方考えていくのが本来の科学なんで、どうなってんだというふうに、1人で憤慨をしております。そういう専門家って、私も含めて専門家といわれる人たちは、いったいどういう責任取るのかということになると思います。

水俣学なんておこがましいことを言い出したんですけど、それは私が半世紀以上、水俣と付き合い合ってくる中から考え出したというか、思いついたことなんで。科学技術とか、学問っていうのは、いったい何のためにするんだろうかと、あるいは、法律っていうのは何のためあるんだろうかっていうようなことを考えて、水俣の歴史の中でずっとそれを考えて来たわけですけども。

結局私は、例えば、経済っていうのは何のためにあるんだろう。ある有名な経済学者、ノーベル賞の候補になったような経済学者の方に、経済って何のためにあるのって聞いたら、いかに効率よく利益を上げて、そして、その利益をいかに公平に分配するかということなんだと、元々は。ところが、今の経済っていうのは、いかに効率よく、もうかることばかりになってるって言われて、なるほど、納得したんですけどもね、あっ、そうかと。医学だってそうなんです。確かにプラスの面とマイナスの面と両方あって、プラスだけが象徴されてるというような面が現代ではないかというふうに思ってるわけです。そういう中で、話を、水俣の話にしたいんですけども、水俣病が正式に発見されるのは1956年、昭和31年ですから、もう60年ぐらいになるわけですけども。最初は子どもが発病して、その前から調べてみたら、大人が発病してたんですけど、だけど、大人はいろんな病気があるもんですから分からなかったんですね。子どもの場合は、そんなにいろんな病気があるわけじゃないもんですから、しかも、きょうだいが同時に発病したんで、水俣病っていうのは発見されてくるわけです。

これは、水俣病が正式に発見される3年前です。3年前に、熊本日日新聞という地元の新聞が、こういう記事を載せてるんですね。たまたま水俣の市役所に取材に行ったら、名前まで書いてあるんですけど、漁師の1人が、誰かが猫いらずか何かやって、ネコがみんな死んじゃったんでネズミが増えて困ると。そのネズミが、網かじってしょうがないんで何とかしてくれって、市役所に陳情に来てるんですね。それを、地元記者はキャッチして、記事にしてるんですね。ただちょっと読んでみると半分ぐらいふざけて書いてるんですね。ネコがてんかんか？とかみたいです。もしこのときこの新聞記者が、一歩踏み込んで現地行って調べてたら、ひょっとしたら水俣病の発見者になったかもしれないということなんですけども。

私がこれ出したのは、水俣病っていう、環境を通じて起こる病気っていうのは、ある日突然起こるんじゃないと。起こる前にいろんな現象が起こって、現場ベースで、魚がいなくなったとか、鳥が落ちてきたとか、いろんな自然現象が起こってくるわけですね。人間に出てくるときは、もう取り返しがつかないわけです。時々、鳥を守れとか、魚を守れとかいうと、魚と人間とどっちが大事かみたいな議論が出てくることがたまにあるんですけど、人間が大事なんだけど、魚が住めないようなところに人間がいる、あるいは、鳥が住めないようなところに人間がいるっていうことが問題なんで。鳥が大事か人間が大事か、魚が大事か人間が大事かとかいわれても、それは次元が違うわけですね。水俣は、私たちに教訓として教えていると思うんです。

このネコの記事から3年半ぐらいたって、1956年の5月に、子どもが次々と発病したんです。そのために水俣病は気がつかれたわけですね。これが第一報なんです。これは、熊大が水俣病を発見したというときの第一報なんで、世界で水俣病を報告した第一報なんです。これで分かることは、子どもが次々と発病したから発見されたんですね。つまり環境汚染によって被害が出るときに、誰が一番最初に被害を受けるかっていうと、これやっぱり生理的な弱者、つまり子どもであつたり、お年寄りであつたり、おなかの中の赤ちゃんであつたり、あるいは、もともと病気を持ってる人であつたり、そういう生理的に弱い人が被害を受ける。当たり前ですけどね。という

ようなことを、実はこれ示しているわけです。

これ古い写真ですけども、患者さん、正式発見第一号の家なんですけども、ご覧のように自然の中に自然とともに生きている人たち、本当に、窓から、縁側から魚が釣れるような、そんなふうに自然の中に生きている人たちが、まずは犠牲になる、それは当たり前ですけど、そういうことを象徴している写真だと思うんですね。ここの5歳と3歳の女の子が同時に発病したので、おかしいと思って保健所に届けたということが、水俣病正式発見の糸口になっていくわけです。真ん中に座っている女の子が、そのとき3歳で発病した実子ちゃんという子ですけども、お姉ちゃんが5歳で発病し、この子が3歳で発病したんですけども。お姉ちゃんの方は亡くなったんですけど、この子は今も生きてるわけですね。だけど、言葉も出ないし、何にも自分のことはできない。もう58ぐらいになりますかね。でも、今でもおむつをしてるという状態です。この子ですけども、にやにやして、いつも海を眺めているわけですけども。この子のお父さん、お母さんは、もう既に亡くなってしまって、よそに行ってたお姉さんが今面倒見ておられるんですけど、全面介助です。言葉も全然出ないし、ただ座ってる。ご飯も、だから、時間を見て口の中に押し込んでやるような形で、しかし、生命力が強いんでしょうね。何遍か肺炎になったりして、もう危ないって言われたことがあるんですけども、50何年間、彼女は耐え抜いて生きてるわけです。私たちは、この子には一日でも長く生きていてもらいたいと思っています。例えば言葉の一言も話さないですけども、この子の存在が非常に貴重な、少なくとも、最低どんなに考えても、この子が生きてる限り水俣病問題というのは終わらないというふうに私たちは思っ、この子は大事な人だと思っております。

これはまた、話は元に戻しますが、私が最初にいたころ水俣で見た子ども、これ5歳で発病した、今の子とは違うんですけど、しかし、3軒ぐらい隣の家の子なんですけども。私が診た中で一番重症な子どもで、あるジャーナリストが『生きる人形の告発』という本を書きました。これが恐らく、水俣病のドキュメンタリー記録としては一番古いんでしょうけども、そのタイトルになった子ですね。生きる人形って、ちょっと失礼な気はするんですけども、当時そういうふうにして或るジャーナリストが、『生きる人形の告発』という本を書いた。恐らく水俣病のことを書いたドキュメントとしては、一番古いものだろうと、この子のことを書いたんですね。

きょうは、大人の方が多い。学生さんが多いかなと思って、ちょっとこういうのを持ってきたんですけど。病気の名前をどうするかっていうのがいろいろあるんですけど、医学の常識では、だいたい発見者の名前をつけるんですね。皆さんご存じ、ハンセン病だとか、パーキンソン病だとかいう名前。あれ全部発見者の、最初に書いた人の名前を取って病名をつけるわけです。水俣病も、じゃあ発見者の名前を取って、細川ってつけるかという議論もあったんですけどもね、だいたい地方の名前をつけると、その地方の風土病みたいに取られる可能性があるんですね。

ハンター・ラッセルっていうのは、ハンターさん、ラッセルさんっていう2人のドクターなんですけども、これはイギリスのドクターで、有機水銀で農薬を作ってた労働者が中毒になったんですね。それを知って、日本が世界で初めて報告した。したがって、有機水銀中毒の特徴的症状

を、ハンター・ラッセル症候群と呼んでおります。ハンターさん、ラッセルさんっていうのは、イギリスの医者です。これを熊大の研究班が、この人たちが書いたりレポートを発見することによって、水俣病というのは原因が分かってくるわけです。つまり水俣病の原因が何か分からなくていろいろ一生懸命努力しているときに、ハンターさん、ラッセルさんが書いた論文を見つけて、ああ、これとおなじじゃないかって、ここから、水俣病の原因は有機水銀中毒というふうに展開していくわけですね。そういう意味で、非常に重要な論文なんです。

ところが、面白い、面白いっていったら怒られちゃいますけども、おかしい話で、これが原因究明のきっかけになったんだけど、これが水俣病とイコールになっちゃったわけですね。それである時期は、この症状が全部そろってなきゃ水俣病でないみたいな展開になっていくわけです。それが今日まで問題になってる未認定の問題につながるんですね。つまり原因究明のとき非常に有効であった論文を大事にした、それは必要なんですけども、今度はそれが水俣病イコールになっちゃったから、この症状がそろってないものは水俣病でないみたいなふうになって、たくさん患者たちが切り捨てられていったわけです。だから、例えば、痰と咳と熱と3つなきゃ風邪じゃないとは言わないでしょう？ 全部そろわなきゃ水俣病でないっていうのは変な話なんですけども、当時そんなふうに固まっていったやつたんですね。

これは、私たち医学者というか、科学者の陥りやすい危険なんで、あくまでも一つの仮説なんですけど、その仮説がいつのまにか定説になっていく。定説になることによって、新しい事実が出てきたときに、その定説は新しい事実によって本来なら変わっていかなくちゃいけないですね。ところが、いつの間にかその定説が新しい事実を切り捨てる役割を果たしていくという、皮肉なことを起こすわけです。そうなってくると、それは科学でもなんでもなし、一つの暴走みたいなものですね。実は私たちは、そういう非常に陥りやすいことをやっているわけです。

そっち話がいつと困るんですけども、今起こってる放射線の問題だってそうなんです。今、放射線の判断条件っていうのは、何だと思うんですか。広島、長崎の問題が基準になってるんじゃないですか。それと今起こってることは全然違うんだけど、広島、長崎で起こったことが教訓にはなるけども、これが定義になって、これが定説になっていけば、今から起こってくるたくさんを全部切り捨てることになります。これは私たちというか、科学者が繰り返してきた間違いなんですね。だから、ちょっと脱線しますが、今度のことも、そういう意味では水俣の教訓を学んで、けっして、実態というのは被害者の中にあるんであって、教科書にあるわけじゃないわけですね。昔の実例を当てはめるだけじゃないわけですね。そういう失敗を水俣はしてきたし、そのことを私たちは教訓として受け継がなきゃいけないと思うんです。

これまた話が飛んじゃうんですけど、私が最初に水俣行ったところは、被害者たちは隠れてたですね。これは何て書いてあるかっていうと、この字見たら分かるように、「新聞記者もくっどらう、熊大の先生もくんな云うたで」って書いてあるんですね。要するに、雨戸を閉めて、私たちが調査に入ることを拒否してるわけですね。理由は、ここに「新聞記者もくっどらう」、先生たちがうろろうろするとマスコミがついてくると。マスコミがついてきて、またマスコミがそれ

を書くと、また魚が売れなくなると。魚が売れなくなるとみんなに迷惑かけるから、もうそっとしといてくれって、こういうことなんですね。だけど、この人たち、いったい何を悪いことしたんですか。ただ、目の前の海から魚を獲って食べて病気になったわけでしょう。何にも悪いことをしてない。ところが、何か悪いことしたみたい、雨戸を閉めて、隠れて、そして、私たちが行くことを拒否していたわけです。

当時、こういう状況の中で、水俣の現地をうろうろしてたのが何人かいたわけですね。それは、この3人なんですね。ご存じのように、石牟礼道子さん。これ、作家でしょう。それから、宇井純さん。これ、もう亡くなられたんですけども、東大の工学部の技術論ですね。それから、桑原史成さんっていうのは、カメラマンなんです。みんなバラバラなんです。私がうろちょろしてるころに、この人たちと全然会ったことないわけ。ただ、石牟礼道子さんは、私が診察をして、一軒一軒訪ねて回るところ、誰か女性がついてきてました。女性からつけられるっていうのは、微妙な気持ちですよ。それで、誰だろう、この人と思って、最初は保健婦さんかと思った。だけど、どうも違うなって。笑顔が何ともいえない笑顔で、ずうっとついてこられた。この人何だろう、何だろうと思いながら聞く機会もなく、それから、何年かしてから『苦海浄土』という本を書かれた。あのときの女性は、この人だったのかと思って。あの中に私が出てくるんですよ、一生懸命検査をしてるところがですね。

それから、私が患者さんのうちに行くと、今学生さんが写真撮りに来てたよって、いつも行き違いになって、とうとう会うことがなかった、水俣で。それが、桑原史成なんですね。彼が撮った当時の写真が、貴重な写真なんです。もしあのとき桑原さんが写真撮ってなかったら、当時の水俣の実態っていうのは永久に分からなかったかもしれない。誰も撮ってない。カメラなんて持ってる人なんかいなかったですもん、水俣の患者さんに。それから、撮ろうと思った人もあんまりいなかった。それから、熊本大学に行きますと、東大の大学院生が資料を集めて回っている男がおると。こいつは、これ、資料集めて何するか分からんから、こいつには用心せえと言われたんですよ。はい、はいって聞いて、うん、うんと受けていたんですけど、今考えてみたら、何するか分からんっていうのは、資料集めてたのは、宇井さんだったんですね。これが、宇井さんがそのとき資料を集めたのを書いた、これ、非常に貴重な、水俣病の歴史では大変貴重な資料です。さすがに東大の工学部の大学院生だったから、あの元気な宇井純も、自分の名前を出しきらんだったんですね。それで、ペンネームで出してる、富田八郎って。これ、読み方によれば、「とんだやろう」なんですね。こういうことで、彼はそれを発表したのね。これこそ、医学以外で当時の水俣のことを書いた、ほんとに貴重な本です。これが、桑原さんの写真集ですね。そういうことで、石牟礼の本が飛んじゃったんだけど、まあ。

当時私は、そういう人たちとは接触はなかったし、みんなバラバラだったんですけども、水俣病事件というのは、これは人類史上初めての事件で、これは大変な事件だと。これ、将来に必ず何か役に立つんじゃないかというようなことで現場をうろうろしてた、まったく分野が違う、しかも、お互いに連絡は取ってない。でも、何か共通の認識を持って、現地をうろうろしてたの

があったわけですね。私も、そういう意味でうろうろしてたんで。

これは、きょうは水俣の方からみえた人もいらっしゃる、不知火海沿岸からみえた方もいらっしゃると思うんですけども、この不知火海沿岸っていうのは、ほんとに土地が無いんですよ。八代の方は、昔から埋め立てて広い土地があります。それから、鹿児島の出水の方は、これ、ちょっと広い土地があります。しかしですね、水俣を中心にした芦北海岸っていうのは、山が海岸まで攻めてきてて、ほとんど広い田んぼっていうのは無いんですよ。だから、みんな、こんなに海岸にへばりつくように住んでて、そして、目の前の海の、豊かな魚の、おいしい魚をたくさん食べた、そういう背景があるんです。その背景を知らないと、都会っていうか、東京あたりの偉い先生たちから言わせると、そんなみんなおんなじ物を食っただろうかというおかしな話になるんですね。だけど、他に食べ物なかったわけですよ。今、甘夏みかんが有名だって、甘夏植えてありますけど、これが昔の芋畑。だから、芋食べて、魚食うしかなかった。漁師であろうとなかろうと、みんな魚食って、芋食べて、暮らしたんですよ。そういうことが分らないと、ちょっとですね、例えば、村中の人が手がしびれる、みんなおんなじことをいうから口裏合わせてるんじゃないかという、うそ言ってるんじゃないかとまでいう、極端な学者がいるわけですね。うそいうも何も、他に、魚以外に食べる物がなかったんですからね、そういう。今は違いますよ。今は車がどんどん入ってきますし、コンビニがあつたりいろいろしますけど、50年前の話なんですよ。そういう水俣の背景があつて、そういうところに近代工業といわれた、さっきちょっと紹介がありましたように、私たちの生活に非常に便利なプラスチックやビニールの原料を、チッソが作り出したわけですね。

よく学生にいうんですけど、身の回りからプラスチックとビニールを全部引いてみろっていうんですけどね。今私たちの身の回りから、プラスチックとビニール引いたらどうなりますかっていう。あれが出たときは、もうほんとに便利なものが出たっていうんで、売れて、売れて、もうかって、もうかって、しょうがなかったわけです。だから、チッソは、ぼんぼん大きくもうかっちゃったわけですね。当時のお金で100万ぐらいの排水処理装置を、さぼっちゃったわけです。それが、とんでもないことになったわけですね。

それで、チッソの技術っていうのは、ここで大きな転換を迎えようとしてたわけです。プラスチック、ビニールの原料の、アセトアルデヒドを作るのに、この当時はチッソの技術は、電気化学だったわけですね。石油がどんどん入ってきて、石油化学に、まさに切り替えようとする時期なんですね。だから、どうやったかっていうと、チッソは要するに、この工場の次の工場を関東の方に造ってたんですよ、石油コンビナートを。だから、これはもうつぶせばいいわけですね。だから、使えるだけ使って、使い捨てようとしたわけですね。そのために、いわゆる排水処理とか、そういう生産に直接関係ないものは省略しちゃったという、そういう背景があるわけです。ちょうど電気化学から石油化学に切り替わるときに、こういう事件が起こったですね。それに関連していえば、エネルギーが石炭から石油に切り替わるときに、九州では、三池の炭じん爆発っていうのが起こって、たくさんの人が死ぬわけですね。そういうふうな、技術っていうか、世の

中の転換期ですよ。今度だってそうじゃないですか。原子力発電という、技術の転換期でしょう。そういうときに、こういう事件が起こるっていうのは、何ていったらいいんでしょうね。

この排水口から出て行ったわけですね、有機水銀が。だから、工場から見りゃ、こっから先は外ですけど、水俣病から見りゃ、ここが入り口なんですよ。こっから水俣病は始まった。そして、不知火海に広がっていったわけです。ただ、不知火海は、これはほんとに、私は環境問題でいろんな世界の海あっちこっち行ってきたんですけど、日本の近海ほどおいしい魚が獲れて、豊かな海っていうのは、ないですよ。日本の人が自覚する以上に、素晴らしい海なんですよ。何でだろうと思って、僕は専門じゃないからいろんな人に聞くんですけど、やはり島があって、森があって、人が住んで、そっから適当に餌が下りてくる。しかし、それだけなら、例えば、インドネシアとか、マレーシアなんかも、人がいっぱい住んで、森があって、海があるわけでしょう。だけど、あそこの魚は、こんなこというと怒られるか、あんまりうまくないですよ。キンキラキンの真っ赤な魚とか、黄色い魚とかいっぱいいますけど、きれいですけど、あんまりうまくない。日本の近海っていうのは、春夏秋冬、つまり四季があって、潮の流れが上がってきたり、下がってきたりして、そして、ほどよく人が住んで、森があって、その非常に微妙な環境にあって魚がおいしいんじゃないかと、私は思ってるんですけどね。だから、ほんとにおいしいですよ。だから、それは日本の近海、瀬戸内海もそうだし、有明海もそうだし、とにかく日本の近海の魚というのは世界一おいしいと、私は思ってます。それは、そういうふうに恵まれてる。ただ、その恵まれたのを、あんまり私たちは自覚してなかったんじゃないかというふうに思うんですけどね。

これは、ある日の漁師の食卓ですけど、学生連れて行ったので、この日はちょっと特別かもしれないけど。このお皿の中で、海から獲ってないのは、キュウリとピールぐらいですよ。あとは全部海から獲ったもんね。煮付けあり、刺身あり、湯引きあり、とにかくこういう、今でもときどき漁師が訪ねてきてくれるんですよ、熊本まで。それで、うちの包丁が切れんち言うて、包丁まで持ってくるんでね。それで、でね、もういいって言ってから、また下ろすんですよ。とにかく食べ残さないと、もてなしたようにならないというか、悪い習慣だからやめろって言うんだけど、何かそういう伝統があって、もういいって言ってから、またバーツと持ってくるんですよ。だから、とにかくそういうのをうまく、恵まれた、結局彼らは見てくれは非常に貧しかったけども、食生活は非常に豊かであったわけです。そして、貯金通帳は空だったかしらんけども、海が貯金通帳みたいなもんで、お金がなくなったら、海に下ろしにいきゃよかったんですよ。その貯金通帳を押さえられたわけですから、明るく日からほんとに生活困っちゃったわけですよ。

この図は、いわゆる食物連鎖というもので、私たちはたくさん間違いをしてきた。あの干潟は、何とも役に立たんじゃないかってね。役に立たんような虫みたいなのがいて、役に立たないから埋め立てて、農地を造るか、住宅地にした方がいいんじゃないかっていうふうにして、どんどん、どんどん埋め立てちゃった。ところが、この食物連鎖の考えからいけば、あの干潟にいる名

もない生き物と私たちの命っていうのは、実はつながってたわけですよ。そういうものを食べて魚たちが育ち、その魚を私たち食べてると。ところが、それが見えなくなっちゃってたわけですよ、私たちは。だから、もったいないな、何の役にも立たんこんなところ埋め立てて、工場でも呼んだ方がいいんじゃないかとか、住宅でも建てた方がいいんじゃないかっていうふうにして、日本中あっちこっち埋め立ててきちゃったわけですよ。そういうことを水俣が、私たちに教えているわけですよ。だから、名もないような干潟のちっぽけな命と私たちの命というのは、これ、つながってんだと。それを水俣病というのは、具体的に教えてくれたわけですよ。

というのは、もっと専門的にいうと、食物連鎖によって中毒が起こったっていうのは、水俣病が初めてなんですよ。それまで中毒というのは、人類はたくさん経験してます。それはもちろん、人間が火を使い始めたときから、既に一酸化炭素中毒は発生してるわけですからね。その他いろいろな中毒を、人類は長い歴史の中で経験をしてきたんだけど、食物連鎖を通して起こってくる中毒というのは水俣病が人類史上初めて。私なんか学生のころ何て習ったかという、毒は薄めて捨てろと。毒は薄めりゃ毒でなくなるという、希釈放流というのがあるんですね。だから、工場排水っていうのは薄めて捨てればいいんだと、いうふうになってたわけですね。確かに、薄めて捨てれば毒は毒ではなくなります、一時的にはね。ところが、それが食物連鎖の中で、だんだん、だんだん、また濃くなってくる。

ちょっと脱線しますが、耳を疑ったんですよ、今度の放射能のあれのときも、海で薄まるから大丈夫って言ってるでしょう。水俣病の経験を全然学んでないと思ったんです。薄まるでしょう、確かに、一遍は。だけど、それが食物連鎖の中で濃縮されていくということは、水俣で経験したじゃないですか。それを、薄まる、薄まるって言ってるわけですよ。だから、不思議でしょうがないですね。だから、いったい私たちは何を学んできたんだろうと思っています。

これは、当時の写真を2〜3枚お見せしますが、漁師が、魚を獲っても誰も買ってくれないだったらどんな暮らしになるか。今と違いますよ、あのころ。明るく日からは、ほんとにどうしようもない暮らしになるんですよ。これは、私。今は、ここ埋め立てて立派な家がたくさん建ってますけど、当時の漁村ですけど、ほんとに畑も田んぼも無いところですから、海の魚を食べるしかないっていう、そういう環境であったわけです。こういうところに、生まれつき障害を持った子が居るっていう話を聞いて、私は行ったわけです。もちろん医学的には、脳性小児まひという診断がつくわけです。しかし、脳性小児まひっていうのは、診断はつくけども、これは病名じゃなくて、症状名なんですね。だから、何が原因で脳性小児まひになったかということになるわけです。ただ、調べてみたら、水俣病は魚を食べて起こる病気、だから、魚を食べなきゃ水俣病にならない、これ当たり前ですね。この子たちは、魚を食べてなかったわけです。そこで、水俣病と診断がつかなかったわけですね。そのことを、僕は、あるお母さんから聞いて、それで、それを調べてみようと思った。これ、もし本当なら世界で初めてで、これは大変な大手柄だと私は思って現地を調べたんですけれど。

調べてみたら、こんな小さなところに、7人もこういう子がいるわけですよ。これ見たら、お

かしいなと思うのは当たり前ですよ。ひょっとしたら胎盤を通してね。で、魚食べてないって言うんですよ。水俣病は魚を食べて起こるわけですから、食べなきゃ起こらないわけです。この子たちは、魚たべておらんって言われるんですね。食べておらんから、水俣病じゃないと思ったんですよ。だけど、よく調べてみないといかんと思って、調べてみたらこんなにたくさんいるんで、こりゃただ事じゃないわいと思って、これは、患者さんのうちを訪ねて回っている写真ですけども。一軒、一軒を訪ねて回って、こういうところに、こういう患者さんがいたわけです。それが、こんなふうに沢山いたわけですね。これを見たら、これはお母さんたちが言うのはほんとかもしれないと思ったわけですね。

ただ、医学の常識では、胎盤は赤ちゃんを守ってくれるっていうのが常識なんです。これは大事なことなんです。生物が生き延びてきたのは、胎盤が赤ちゃんを守ってくれたから生き延びてきたでしょう。もし胎盤が赤ちゃんを守ってくれなかったら、その種は絶えたんです。だから、地球上にこういう生物が生き延びてきているということは、お母さんが、赤ちゃんを守ってくれる機能を獲得した生き物だけが生き延びてるわけでしょう。だから、毒物が胎盤を通るなんてことは非常識だったわけですね、当時。だから、そんなことはあり得ないというふうに思ってた。

しかし、私は大学院生で、あんまり勉強してないからか、常識がなかったのかもしれない。だから、これは大変なこっちゃと思って調べてみようと思ったんですね。そして、これは、もし私が発見者になったら、世界で初めてだから、ノーベル賞とまではいかなくても、大変な手柄だと思ったんですよ。ところが、大学に帰って調べてみたら、みんな気がついてたわけで、けっして私の発見じゃなかったわけですね。そらこんなにたくさん出てたわけですから、みんな気がついてるわけですよ。ただ、それをどうやって世界っていうか人類史上初めてのこういうのを証明するかっていうことでみんな困ってて、たくさんの研究者、先輩たちは何をしてたかっていうと、動物実験をやってたわけですね。動物実験、何でやったかという、ネコでやってたんです。ネコは魚食べますから、水俣病の実験には非常にいいんですよ。ネズミや、ウサギは魚を食べんから、なかなか水俣病の実験には役に立たんことはないですけど、難しかった。だから、ネコがたくさん実験に使われたんですね。ほんと気の毒な話ですけどね、ネコいっぱい死んじゃったんですよ。

ところが、ネコに魚を食わせて、ネコを水俣病にするのはわりと容易なんですけど、ネコは魚を好んで食べますから。ところが、妊娠したネコに食べさせるっていうのは難しかった。っていうのは、妊娠したネコを捕まえるのが大変なんですよ。それでみんな難航してた。それで私は、ネコ実験は駄目なら、とにかく現場に行ってお母さんたちから何かを学びましょうと、それで何か結果を出そうと思って現地に行った。それがよかったんですね。

こういう写真は、ちょうど私が集めたときに、集まってくれた患者たちの写真です。これが、あるときにお母さんがヒントをくれたんですよ。先生たち何考えてるんですかって、怒られたんですね。みんなおんなじでしょうがって言われたんですよ。このおんなじでしょうがっていうのがヒントなんですね。確かに、脳性小児まひというのは、たくさん、いろんな原因で起こります

よね。それぞれ症状はちょっとずつ違うんですよ。ところが、お母さんから、みんなおんなじでしょうが、先生たち何もたまたましてんだって怒られた。ああそうかって、おんなじかっていうこと、で、そこで、ここに書いてますように、お母さんから、「この子たちは、私の食べた水銀を吸い取ってくれた」と。だから、妊娠中にいっぱい魚を食べたから、そのせいじゃないかっていわれて。そんなばかな、胎盤は赤ちゃん守ってくれるんでそんなことないよと言ってたんですけども。

それで、結局ここに書いたように、じゃあ、みんなおんなじだということを証明してやろうと思って、それで、この子たちはおんなじ症状であるっていうことを、まず証明をした。そして、あとは、発生の時期や場所は水俣病とまったくおんなじで、そして、家族に水俣病がいるとか、母親が妊娠中に魚を食べたとか、そういうのをいっぱい集めて、私はこれで胎児性は証明できたっていうふうに思ったわけですね。それで、発表しようと思ったら止められちゃったんですよ、偉い先生たちから発表は早すぎるって。それで、若かったせいで、ちょっと怒っちゃって、ここでけんかをして偉い先生に勝つわけないわけで、結局出してた演題を引っ込めさせられたわけですね。

ところが、私が見てた患者の1人が亡くなったんですね。それを解剖した結果、胎盤を通して起こった有機水銀中毒だったっていうのを、新聞で発表しちゃったんですよ、竹内という先生が。何で竹内先生と僕と差をつけたか、向こうは教授だし、僕は大学院生で、差をつけられたわけ。竹内先生は止められなかったわけ。それで、学会があって、竹内先生がそれを発表されたんです。その後僕が手を挙げて、今発表された患者さん、僕は診てました。こうこうこうで、こういう症状がありましたってことで、おんなじような患者さんが他にいっぱいあるっていう話をして、それでちょっと大騒ぎになって、それで胎盤を通った有機水銀中毒である、胎児性水俣病ということが、初めて世界で公認されたんですね。

これが胎児性、つまり胎盤は、今や赤ちゃんを守ってくれないよっていうですね。これは今、私が確認している患者さんですけども、だいたい77人確認してます。ただ、これ悔しいっていうかね、ほんとに悔しいんですけど、反対側の御所浦とか、獅子島とか、長島という、鹿児島県側には出てないことになってるんですよ。でね、出てないわけじゃないですよ。外国なんかで発表すると、この島の人たちは魚食わなかったのかというんですね。ところが、調べてないから白紙なんです、いなかったんじゃないんですよ。だから、もう水俣病が発見されて50年たつのに、いまだに御所浦や、獅子島、長島の胎児性の実態っていうのは分からずじまいなんですね、恥ずかしい話ですけども。

私は、水俣病の問題が終わったんで、一応これで一件落着と思って現地を離れちゃうんですね。それ、離れる理由は、一つはちょうど三池で炭じん爆発が起こったんですね。あれは、ガスを吸った患者さんが450人ぐらい死んで、900人ぐらいの人がガス中毒になったんですね。それで私たちは、そのガス中毒の患者さんの治療に毎日三池まで、通わなければならなかった。そのためにちょっとしばらく留守をしたんです。そしたら、昭和40年、1965年になって、新潟で水俣病

が起こったっていうニュースが入ってきたんです。まさかと思ったんですね。だって、あれほど熊本で、水俣病の原因は、苦勞して、苦勞して、はっきりしてるのに、おんなじような工場がですよ、何もせんで流してたなんて信じられますか？だから、まさかと思ったんですけどね。しかし、行ってみたんですけども、やはりチッソとおんなじ工場が、おんなじことをして、しかも何にもせずに捨ててたわけです、川に。

そのころ、昭和電工ですけど、昭和電工は何て言ったかというと、もちろんおんなじ工場だからチッソに調べに行ったらっていうんですよ。チッソに調べにいったら、チッソは排水装置を付けてたっていう、サーキュレーターっていうやつですけど、大きな、当時で200万ぐらいかかった排水装置を付けてたっていうんですよ。ところが、これは世論向けに付けたんであって、効果が無いんだって言ったちゅうわけですよ、チッソが。だから、昭和電工は、そんな偽じゃないけど、見せかけの排水装置をしなかったと。もうね、それ聞いてあぜんとしますよ。チッソは知ってたんですよ、装置付けたけど、あれ効果が無いってこと。そして、それだまされた。当時の、寺本っていう知事がいたんですけど、知事の前で、浄化装置を付けたからこの水は飲めますって言うて、社長が飲んで見せてるわけです。だから、みんなこれで装置を付けたと思ったんです。そしたら、付けてなかった、効果の無いものを付けてた。まあ、水をきれいにするのを付けた。だけど、メチル水銀は垂れ流しなんです。それを、昭和電工がばらしたわけです。自分たちがやられたわけです、裁判で、何で付けんかったかって言ってね。そしたら、いや、チッソに調べに行ったら、これは効果が無いからあれだから、われわれは付けんかったってばらしたわけですよ。もうひどい話がいっぱいあって、そんな話を言うといつまでも脱線しちゃうんで急ぎますけど。

これは随分前、1967年ですけども、新潟では何が起こったかっていうと、胎児性が生まれるから、赤ちゃん産むなってやったわけ。それね、赤ちゃん産まなかったんですよ。それで、1人胎児性ね。ところが、新潟は何て言ったかという、熊本はさっき僕が説明したように、たくさん生まれたんで水俣病って分かったと。ところが、新潟はたった1人だから、今度は診断が付かなくて言い出したわけです。つまり熊本ではたくさんいて、おんなじ症状だから、胎児性だって診断が付いたわけでしょう。ところが、新潟は、子ども産むなってやったもんだから、赤ちゃん産まなかったわけですから、1人だけ生まれたから、1人だから診断が付かないって言って、これ付かなかった。それで、お父さんが、その子をおんぶして水俣まで連れてきて、私に、これ胎児性かどうか診てくださいって言われたんですね。僕は、水俣の胎児性の患者さんとまったくおんなじ症状だったんで、おんなじだっていう診断書いて差し上げたんですけどね。もちろん後で認定されるわけですけども、そんなばかな話があるかっていうわけですよ。産むなって言っていて、そのこと自体も大変ひどいんですよ。みんなどうされたかよく分からないんです。ただ、私が知ってる限りでは、2人の方は赤ちゃんを人工流産しちゃいました。1人は避妊手術までされてるんですね。3人は分かってるんですが、後の人はどうしたかは、これはプライバシーの問題もあって分からないんですけど、そんな状況なんですね。

話があっちこっち飛んであれですけど、これは芦北なんですけど、ほんとに山がもう海まで迫ってて、食べる物は魚しかないような、これは昔の写真ですよ。こんなににぎわって、魚をみんな食べてたんですよ。これは昭和の、ちょうど水俣病が起こるちょっと前ぐらいの写真ですね。こんなにみんな、魚食べてたんですね。これは古い昔の漁村ですね。当時の写真です、今はちょっときれいになってますけどね。これは子どもたち、今は大人になってますけども。子どもたちも、見てください、目の前に干してあるの、これおやつ代わりにみんな食べてたわけですよ。だから、そういう背景があって水俣病があるということをちょっと。古い写真が手に入ったんで、私、これしてるんですけども。

私たちは、胎児性の患者っていうのは、今お見せしたように重症な患者だけを、今までは水俣病としてきたわけですけども、実は隠れた、まだ患者さんっていうのはたくさんいるわけですよ。確かに、今、私たちが胎児性って診断した人たちは、見たら分かるような人たちなんですよ。いわゆる脳性小児まひとか、あるいは、学校に、今は違いますけど、当時特殊学級っていった、そういう学級に行った人に関しては、少しは実態が分かってる。ところが、ちょっと見た目には分からない。で、なんとか高校あたりまで行って、そして、なんとか都会に出て仕事をした人たち、いわゆる胎児性世代っていうのがたくさんいるわけです。そういう人たちが50すぎて、今になっていろいろとやっぱりこう。景気のいいときは良かったんですけども、だんだん景気が悪くなる、年も取る、雇用も悪くなるっていう中で、だんだん脱落してきて、今水俣に帰ってくるわけですね。帰ってきたら、もう水俣病は終わったよってされてるわけですよ。そういう人たちが立ち上がって、今また第三次の住民検診なんてことになってるんですけども、しかし、それでも漏れる人たちがいっぱい出てくるわけですよ。だいたい、あんまりやる気無いんですもん。筆でピッピッとして、それで分かるか分からんかして、ボンボン、ボンボンやってるんですよ。だから、そんなことで診断が付くわけがないよね。ところが、あんまり見たこともないような、まあ、ひがんでるわけじゃないけど、私たちには全然声がかからないわけですよ。何十年も水俣病を診てきた私たちには全然声がかからなくて、命令によって動けるような人、例えば、国立病院だとか、日赤の病院だとか、市立病院だとか、そういうところは職権っていうか、職場命令で派遣して、そして、検診させてるわけですよ。そして、体をゆっくり診ようとするとな怒られるんですよ。とにかく感覚障害だけ診りゃいい、筆でピッピってして、それだけで終わりって、そんなふうに今やってるんですよ。

そういう人たちが、今3万人ぐらい。よく詳しく見るとですね、この人は高校まで行ってるんですよ。だから、漢字なんかいっぱい知ってます。ところが、横に書いてあるこの絵が描けない、まねできない。これは医学的にはいろいろあるんですけども、説明が付くんですけどね、ある脳の部分が、見て、頭の中で組み立てて、そして、それを描くという、この回路がやられたら描けなくなるというのがあって。私は三池の炭じん爆発で、仮病とか偽病っていわれた人たちに、こういう症状がいっぱいあった。それを知ってたから、今こういう若い人たちにやらせる。高校出てる人が信じられないでしょう。こんな、ああいう絵が描けない。そういうのは今までみんな隠

してきたんですよ。全部隠してた、恥ずかしいから。それを私たちは、今から暴かなきゃいかん、残酷にも、という状況になってると。これ描けないんですよ、こういうやつね。皆さん、ちょっと描いてみてください。だいたい簡単なんです。だけど、脳の整理からいうと、これ非常に難しいね。見て、立体感覚をつかまえて、そして、それを理解して描くという、かなり簡単なようだけれど複雑なんですよ。だから、そういう、ちょっとひねってやると、できない。こういう見えない症状っていうものを今からどうするかっていうのが、今からの水俣の新しい問題だというふうに思っております。

水俣学の話、ちょっと水俣の話をしたんで水俣学の話をしましたけども、水俣病半世紀やってきて感じたことは、やはり最大の間違いって言ったら怒られちゃうんですけど、これほど社会的な、多様な病気を医学にだけ丸投げしちゃったっていうのが、僕は失敗だったと思うんですね。それ確かに病気ですから、医学が重要な役割を果たさなきゃいけないことは、これは言うまでもないわけです。しかし、これほど社会的、政治的、しかも複雑なものを医学だけに丸投げしちゃったということが、私は失敗であったんじゃないかと思うわけです。そうなってくると、もう少し最初から、広い視野で、いろんな学問が、いろんな分野が協力して、そして、水俣病問題を取り上げてくるべきではなかったろうかというふうに思ってます。

いくつか、じゃあどういうものを、どうすれば良かったかというのは、まず、専門でありながら各専門の壁を取り外す。そして、今度は現場を大切にする。やっぱり机の上じゃ分からないですよ。当時厚生省で会議を何遍もやっておりまして、その会議の記録なんかが多少残ってて、私、目にする。当時日本で一流といわれる学者たちが話し合いをしますけど、的外れなんですよ。そんなにみんな魚食うだろうとか、自分たちの視点で見てるから。だから、みんな同じ症状はおかしいとか、とにかく最初から疑ってるわけですね、そういう。やっぱり行ってみれば、一目瞭然なんです。そういう偉い学者の人たち、ほんとに現場に行って、さっきお見せしたような漁村に連れて行って、こういうところで魚以外にあなた何食べますかって。もうこれで一発で理解できるわけですね。そういう意味で、現場を大事にする学問でなきゃいけないんじゃないかというふうに思っています。

それから、今、言ったように、枠を外してしまうという。それから、よく最近グローバルな学問ってことが言われてます。環境問題はグローバルな問題だと言われてます。それはそのとおりです。しかし、地球環境と言ってる限りには、あんまり傷つかんのですよ。問題は、足元の問題。自分の身の回りの問題をいろいろやると、それは、下手するとやけどするんですね。だから、地球環境の話をしてる限りにおいては、そう簡単に傷つかない。しかし、必要ですよ、地球環境問題も必要なんです。しかし、地球環境問題って言ってる限りにおいては、そう簡単には傷つかないけれども、例えば、身の回りのことを取り上げて、身の回りの環境問題をいろんなことをやり出したら、必ずいろんな摩擦が起こってくるわけですね、残念ながら。そういう意味では、グローバルな学問ではあるんですけども、やっぱりローカルな問題。ローカルな問題を、だけど、一生懸命やっていれば、それは自然とグローバルな問題につながっていくんだということを申し

上げておきたいと思います。

そして、最後に何のために、じゃあ学問をするんだということですよ。何のために学問するのよっていう話ですよ。それは、もちろんいろんなことあるかもしれん、生活のためにとか、新しい発見もあるでしょうね、楽しいとか。そういういろんな枝葉の問題はたくさんありますけど、一番大事なことは、命をいかに大事にするかという、そこのところが一番基本ではないかというふうに思います。だんだん科学の進歩によってですね、命がおろそかにされていってはいけませんよ、本当は。学問っていうのは、やればやるほど命を大事にしなきゃいけない。ところが、どんどん、どんどん、新しい何か知らんけど、戦争なんかが一番いい例ですよ。新しい兵器が開発されて、そして、いかに効率良く、短時間でたくさんの人を殺すかという、そういう研究になってしまってるっていうのはおかしいでしょう。本来学問っていうのは、あるいは、研究っていうのは、そんなためにあったはずではなかったわけですね、そういうことを考えていきます。

ちょっとこれ、当時水俣周辺にどれぐらいの人が汚染されたかということですね。これは、私が海岸沿いだけで集めてまとめたんですけども、どんなに数えても20万の人は住んでたわけですね。だから、私は、私流の表現をすれば、ジワッときた原爆だって言ってるんですね。確かに、原爆はドカーンと一発だったんですけど、だけど、水俣病っていうのは、ドカーンと一発では、これは何十年もかかった。しかし、ジワッとこの不知火海沿岸に、1960年の国勢調査をここに取り上げたんですけど、どんなに少なく見積もっても、少なくとも濃厚に汚染された人たちが20万はいただろうという、私は見積もっているんです。それだけじゃないです、例えば、水俣から山野線っていうのが、汽車が走っていて、私は鹿児島出身なんですけど、鹿児島の方に走ってるんですよ、あの汽車は。今は無くなったんですけどね、あれ。僕は学生のころ、ときどきその山野線に乗りよったんですけど、朝からおばちゃんたちが、魚を山のように積んでドドドーって乗ってきて、そして、この山野線を伝わって、鹿児島の方にどんどん魚が流れたわけですよ。この行った先がどうなったかというのは、誰も調べてないんですよ、信じられてないけど。だから、けっして水俣病は終わっていないということを、私は申し上げたいわけです。そして、それは単に山野線がどうではなくて、世界中の問題になってくるわけですね。

これは、私が熊大時代から現在に至る時代、いろいろ環境調査に行った地図なんですけど、今、世界中で環境問題っていうのは大変なことになってるわけですね。これはアメリカの水俣病なんです。これは豚肉を食べて、豚肉の餌に有機水銀が含まれてたんですね。それを豚に食わせて、その豚を食べちゃってるんですね。有機水銀中毒になった例なんです。

これは、カナダの例なんですけど、カナダはパルプの工場が、漂白に水銀を使う。それが、垂れ流しになってる。白人に言わせると、あそこに人は居ない、人は居ないって言う。確かに人は居ない。それは、熊本県よりも広いところに2,000人ぐらいしか。しかし、誰が居るかって言ったら、先住民が居るわけですね。先住民がちょっとならしか居ない、その人たちが被害者。だから、白人に言わせると、いや、水銀流したけど、あの辺には人は居ないよって言う。そら確かに日本

から見りゃ、ものすごい広いところで人間はポロポロしか居ないんですけど、居ないことはないんですよ、少ないけど居るんですよ。しかもその人たちは、伝統的な暮らしをしてる。つまり自然の中に、自然とともに生きてる人たちなんです。こういう人たちの未来をいったいどうしてくれるのよ、ということになっていくわけです。

これは、ブラジルです。今、ブラジルでは金を採ってるんですね。金を採るときにアマルガムと言って、皆さんご存じだと思うんですけど、金は水銀に溶けるんですよ。これ不思議な性質。砂の中に水銀を入れて、金をその水銀の中に溶かす。そして、砂を洗い流して、その水銀を今度火であぶると、水銀飛んじゃうんですね。あと、金だけ残る。本当は、むちゃくちゃなことなんです。そうやって金を採ってるわけですよ。私は、ブラジル行ってその調査を、現地のアマゾン川のうんと奥まで行って調査をして、危ないって、とんでもないって言って、ブラジリアに帰ってきて、環境庁、厚生省の人たちに会ったんですけどね。ブラジルの役人が何て言ったかという、分かっている、法律で禁止してると言うんですよ。法律で禁止してんだけど、彼らは止めない。誰が行って止めるんだって言われて、確かに、誰が行って止めるかって言われると、あの広大なアマゾンの流域、ほんとにどうやって止めたらいいのか分からないですね。だから、まだ水俣病は終わらないんですよ。だから、これはアマゾンの子どもたちです。この子どもたちの未来を、私たちどうやって国際的に守ってあげたらいいのか、水俣を経験したわれわれとしては、国際的な問題として、これを少し広げてあげたいと思っているけども、悲しいかな、われわれの力っていうのは。そして、こういうのには日本の政府も、こういう研究にはお金は出してくれないですもんね。みんな手弁当で行かなきゃいけないということなんです。

これは、アフリカですけど、アフリカもそうなんです、金を採ってるんです。やっぱり水銀を使ってやってるんです。ただ、僕は恥かいたのは、ものすごいほこりなんです。そのほこりの中でやってるわけです。だから、じん肺にならんかって言ったら、いや、もうみんなじん肺になって山を下りていくって言うから、どうしたらいいだろうって、じん肺は水銀より簡単だよって、水まいて、ほこりが立たんようにすればいいんだよって言ったのはよかったんですけどね、よく聞いてみたら、これ大変失礼なことを言った。その水が貴重なんですよ、水が無いんですよ。だから、ほんとに自分たちの飲む水、最低限なんですね。だから、行ってみなきゃ分からないんですよ。ほこりが立つなら水まきやじん肺無いなんて、そんなこと言えないですよ、現地に行ってみればですね。そういうふうには、まだまだ地球規模で見ると水俣病は終わってない。

これは、フィリピンのミンダナオで、とにかく雨が降ったらぶっ壊れるような小屋がずうっと崖っぷちにあって、そこで砂金を採ってます。子どもたちサッカーしよったから、一緒になって遊んでたんですけどね。ここ入るのに、もう武装してるんですね。とにかく武装して、普通は入れない。ただ、私たちは、被害者っていうか、住民と結びついてるためにわりと安全なんですね。どこでも入っていきなり、われわれを敵とは思ってないわけですから、どこでも今までは入って行けた、もちろん注意しなきゃいけないですけども。これは、今はすごいんですよ、無法地帯ですね。だから、政府は水銀使わせないとか言っても、もう武装して、とりでを造って、その中

で金を採ってますから、誰でも入れない、そういうところです。

最後になりましたんですけども、私たちが水俣学というのは、まとめますと、これは、学問は何のためにするのかと。それは、この弱い立場の人のための学問でなきゃいけないんじゃないかと。そして、それは専門というものはもちろんありますけども、専門も押し広げて、そして、誰もが参加する、開かれた学問じゃなきゃいけないんじゃないか。それから、バリアフリー、境界を取り払って、みんなが参加するような、そんな学問ができればいいなという、これは願望です。あくまでもまだ完成したわけでもないし、試行錯誤の問題ですけども、こういう願望を持ちながら、私たちはやっております。ただ、水俣学っていうと、何かネーミングが良かったのか、あっちこっちでちょっと注目をされたりしたこともあるんですけど、実は100年前に田中正造がちゃんと言ってるんですね。だから、けっして私の発案でもないわけで、足尾鉍毒事件と水俣病事件っていうのは、非常によく似た構造を持ってまして、環境破壊ということ、それから、政治問題になって初めて行政が介入してくる、それまで放っておくと。だから、水俣の場合も放つとかれたんですよ。ただ、あそこで漁民たちが蜂起して、工場になだれ込んだんですね。あのとき2000人ぐらいの漁民たちが、工場排水止めろ、ってなだれ込んだの。このとき警察が動いた。そして、漁民が100人逮捕された。そして、裁判にかけられたんです。そして、芦北とか龍ヶ岳の3人の漁業組合長は、懲役1年の判決を受けたんですよ。ただ、執行猶予がついたんですけどね。そういう治安問題にならないと動かないという、そういう問題があったり、それから学者が動員されて、それをもみ消そうとする動きっていうのが出てくるっていうのは、非常に足尾鉍毒事件とよく似ているわけですね。

これは、ご承知の田中正造です。この田中正造が谷中学というのを、これは、今現在もこんなふうにも木も生えてません、元あった村、お墓だけ残ってます。これは、今の工場ですけどね。こん中で田中正造が何を言ったかという、自分は農民たちを教育しよう、あるいは、農民たちを指導しようと思って、谷中村に入ったと。しかし、自分は、谷中村に入ること、農民たちからたくさんのことを学んだと、それを私は谷中学と言うと、こういうふうに言ってるんですね。私は、それにあやかって、水俣学というのは、けっして学者が、あるいは、専門家が、こういうふうにはやらないかんっていう、押しつけるんじゃないで、やはり被害者というか、現場からいかに学ぶか。その学んだものを、どう専門化していくか、ということが水俣学だというふうに思ってます。そういう視点で、被害者の人たちを講師に呼んで、そして、今、シリーズとしてこういう講座を開設したところです。こんなブックレットを出したりしているわけです。

50年の歴史をジャジャジャッと進めていったんで非常に分かりにくいところもあったかもしれないですけど、あるいは、拝見しますと、顔なじみの方がいらっしゃったりして、同じ話をまた聞いたと言われる方もいらっしゃると思いますけども、こういう機会をつくっていただいて、筑紫女学園大学の先生方が、苦勞をされて、こういう企画をされて、呼んでいただいたことを感謝してます。どうも話が、半世紀の話を、脱線しちゃったんで分かりにくかったと思いますけども、今後とも水俣をよろしくお願ひしたいと思います。どうもご静聴ありがとうございます。

拍手

【同会】 どうもありがとうございました。残り30分ぐらいを質疑応答に充てようと思います。多くの方がいろいろお尋ねしたいことがあると思いますが、マイクが2本ありますので、手を挙げていただいて、しゃべっていただこうと思います。どなたかいらっしゃいませんか？

【質問1】 筑紫女学園大学の現代教養学科の二村綾と申します。質問なんですけれども、妊娠中の母親から胎盤を通じて胎児に水銀が行ってしまい、胎児性水俣病が発病したということを学ばせていただいたのですが、母親が食べた魚などに含まれていたメチル水銀が、すべて胎児に行ってしまったのでしょうか？それとも、母親にもメチル水銀の影響があったのでしょうか？ということをお聞きしたいです。

【原田】 それ、ちょっとよく分からないんですけども。どれぐらいが赤ちゃんに行っちゃったか、何%行っちゃったかっていうのは分からない。ただ、お母さんの症状は軽いです。つまり、例えば、家族が5人いますでしょう。みんな同じ物食べてるんですよね、ご飯ですから。そうすると、他の人はかなり症状がひどいんですけども、妊娠してたお母さんだけが、一番軽い。これは恐らく、お母さんが食べた魚の中の有機水銀が赤ちゃんに行っちゃったから、お母さん軽いですよ。だから、初期のころの医学リポートには、母親は正常だって書いてある。母親は正常だから、また逆にいうと診断が付かなかったんですね。母親が、例えば、水俣病であって、生まれてきた赤ちゃんに症状があればわりと早く診断が付いたかしらんけど、お母さんが一見見たところピンピンっていうか、元気だったもんだから、だから、しばらく診断が付かなかったわけです。っていうのは、どうしても、胎盤を通して中毒が起こるなんていうのは、水俣以前にはなかったわけですよね。だから、例えば、お母さんが食べた水銀が何%が赤ちゃんに行ったかというのは、私は分からない。それは恐らく、例えば、ネコなんかで実験をしたら、ひょっとしたら、与えた量と、赤ちゃんに含まれる量と計れば、何%ぐらい行ったっていうのは分かるかもしれないんですけども、何%ぐらい行ったかは、私は分かりません。ただ経験的に、ほとんどが赤ちゃんに行っちゃうから、お母さんの症状は非常に軽かったということですね。

だから、本来は、お母さんの胎盤っていうのは赤ちゃんを守ってくれるわけですよね。毒物をお母さんが食べても、普通は胎盤を通らないんです。無機水銀の場合は胎盤を通らないから、お母さんが無機水銀の中毒になっても、赤ちゃんにはほとんど水銀は入らない。ところが、有機水銀になると、胎盤を通してスイスイと赤ちゃんへ入って、お母さんの方はむしろきれいになっちゃう。だから、こういうことは水俣病以前には信じられなかったわけです。だけど、水俣病で、だから、逆にいうと、そういう前例がなかったんで、そういう判断が出るのが非常に時間がかかった。そのために、さっき見せたように、島の方の、情報が届かない無医村の地区は、結局今でも何人そういう赤ちゃんが生まれたか分からずじまいになっちゃったわけですね。まあ、そういうことで。

ついでに言えば、この水俣病以降ですよ、胎盤を通るっていうことが分かったのは。今だった

ら皆さん知ってるの、ダイオキシンですね、P C B。これは、胎盤通っちゃうでしょう。それから、サリドマイド兜って知ってますかな、薬ですね。つまり自然界に無いようなもの、これが胎盤を通っちゃうんですよ、わりと。ただ自然界にもともとあったものは、長い生物の進化の歴史の中でそういうものを排除してきたっていうか、それから赤ちゃんを守ってきた、生物は。ところが、人間の知恵っていうのはとんでもないものをどんどん作ってくるわけですから、そういうものが体の中に入ったとき、母親の遺伝子というか記憶はね、そういうものをどうやって守っていいか分からない。だから、自然界に無いものは危ないと考えていいんじゃないかと思いますね。そういったものも、何かいっぱい身の回りにありますよ。食べ物やら何やら考えれば自然界に無いものばっかりいっぱいある。ちょっと怖いですね。そういうことを、だから、水俣病は、あの胎児性の患者たちは、私たちに警告として発しているというふうに考えていただければいいですね。ちょっと質問に付け加えちゃったんですけども。

司会 よろしいですか？何か他にも質問ございませんか？はい、そこの真ん中の方。

質問2 Kと申します。筑豊の小さな町からやってきました。原田先生、水俣や足尾の鉍毒事件、その他ブラジルのいろいろな公害とか、今まで私たちは新聞やニュースでたくさん見ているんですが、でも、実際に生活の中でとても危険なものが今ありますとおっしゃいましたが、私の地域は、近所では、ほとんど、80～90%は地下水、井戸水で普通の生活をしています。しかし、近くに名前を挙げちゃいけないのかもしれないけど、一度事件になりましたグリーン産業です。経済発展の華やかなころに、部品洗浄するためにトリクレンっていう液を使っていたんですが、こういうのをドラム缶に詰めて、全部、産業廃棄物業者として収集して、何の処理もせずに自分とこの土地に放置してたのが、雨水と一緒に地下に染み込んでしまったっていうのがはっきりしたんです。その他、近くの河川にいろんな廃棄物の、汚染された、処理してない水を流したとかいろんな事件が、今も枚挙にいとまがないことがあるんですね。私たちの体にいつ影響するのかが分からない。とっても危ない橋を渡ってるような気がするんですが、そういうとき、こういうことをいったどこに相談するのか、どこに通報するのか、私たち本当に分からないんです。ニュースや何かでは、いろんな事件が明らかになったときには報道されますが、何かあったときに、じゃあ、どこに相談するのか私たち分からないんですが、いかがでしょうか？

原田 そうですね、どこに相談したらいいんでしょうね。一応形どおりに言えば、それはお役所の窓口ぐらい行かないかんのだろうけども、これがまた頼りないですからね、どうなんでしょうね。ただ私たちの間で、ほんとに、いわゆる官制じゃなくて、わたくし制ね、そういう環境を監視する団体だとか、仲間とかは居るんですよ。しかし、全部をカバーはできないからね。どこ行ったらいいのか、本当は、建前からいきや、そりゃお役所に行くのが建前なんだろうけど、それがあんまり頼りないとすれば、自分たちでそういうものを見つけないとしょうがないという非常に残念な状況ですよ。ただ、しかし、それでも一生懸命やってる人たちが少ないけどいます。居ることはいます。だから、われわれの仲間にもそういう、監視じゃないですけど、環境監視をしているような人たちが居るんですけど、これ民間ですから知れてるわけですよ、資金も

無いし。だから、どこ行ったらいいかっていわれても僕もちょっと困るんだけど、やっぱりそういう窓口があっちこっちにできるような運動っていうか、声をみんなが挙げていくしかないんじゃないですかね。

具体的に、例えば、農薬のこれについてとか、水銀のこれについてとか、ものが分かってる場合は、まだそれでも、少し相談、あっそれだったら、こういうとこの民間がありますよとか言えるんだけど、全体的にって言われると、ちょっと私も答えに困ってるっていうか、あんまり答えにらんで申し訳ないけど、そういうのが、無いのがむしろ問題ですよ、今ね、そういう相談の窓口が。窓口は一応有るんだけど、行っても雲をつかむような話でみんな失望して帰ってくるっていうのが多いです、残念だけど。みんなでそれは、そういうのが相談ができるようなシステムをつくっていくように努力するしかないんじゃないでしょうかね。

それともう一つ言いたいのは、新しい物質っていうのはどんどんできてきている。もちろん薬などもそうなんですけども。ただこれが、10年先、20年先どうなるかっていうの、ほんと分からないことが多いですね。だから、分からないということは、安全っていうことじゃないわけですね。取り違えてある。例えば、ある物質に対して、いや、これまだ危険って分かってないって言うてるわけでしょう。そういう答えをよく新聞やテレビで見ると、担当の人が、まだ危険ってはっきり分かったわけじゃないっていうね、しかも分かったときは手遅れなんです。だからね、これは私が言ってるんじゃないで、武谷先生っていう、岩波新書の中に『安全性の考え方』という本がありますけど、要するに、安全性が確認されないのはみんな危険なんだと、よく考えたら。僕は、この考え方をみんなが持つべきだと思うんですね。ただ今の行政の考え方というか、学者も含めて、考え方は、危険って証明されるまでは安全みたいな、ちょっとすり替えが起こってるんですよね。そこは用心した方がいいんじゃないかと思いますが、それが水俣の教訓かもしれないですね。あんまり答えにならなかったですね。

同会 他にございませんか？

質問3 すいません。Nと申します。一番初めに、水俣病は生理的な弱者から始まったということで、公害が起こって差別が始まったのではないということで終わりましたけれども。といいますと、会社がそういうふうに工場を使い切るっていいですか、そういうふうに消耗していいというふうな判断をするような、そういう差別的な発想になるような、地域的な土壌っていうのがあったのでしょうか？

原田 私は、最初に水俣に行ったときにショックを受けたのは、病気の悲惨さですけどね、さっき、ちらっと2〜3枚お見せしたけど、とにかくみんな隠れるように住んでるわけですね。それで、町の人に聞くとちょっとこう、すごい差別があったわけですね、あそこは貧しい漁師たちの村だからとか。特に、こんなこと言っちゃいかんけど、当時学校へ行って、僕、まず調査するとき学校なんていうののひとつの手がかりになるわけで。学校行ったら、学校の先生たちが、あの村の子たちはって、全然もう差別するわけですよ。私は、公害が起こったからあんな差別を受けてるんだというふうにならずずっと長いことと思ってました。ところが、さっき一つの例としてカ

ナダの先住民、インディアンといわれた人たちの村に入って、それで、いろいろ水銀の調査をして、もちろんカナダの政府、あるいは、カナダの環境省、あるいは、カナダの大学の研究者の人たちとも話し合っているんですけども、あれから、ああ、公害が起こって差別が起こるんじゃないくて、やっぱり差別があるところに公害が起こるんだなっていうふうにね、にぶいんですが気がついたんですね。

そういう目でもう一遍見直してみると、また何か新しく見えてきたんですね。例えば、アメリカの例をちらっと出しましたけども、あれ、やっぱりアメリカも、ものすごい貧しい黒人の家族なんですね。それで、アメリカでも裁判が起こったわけです。農薬会社が水銀農薬を出してたわけですから、それを種麦にして、豚に食わせて、その豚を食べて起こったわけですからね。で、農薬会社と裁判になったわけですけども、アメリカの裁判所が何ていう判決を下したか、結果的には被害者が負けるんですけどもね。農薬の稼ぐお金がどんくらいで、ちょっと細かい数字は……。それで、その農薬によって小麦の生産がいくらあるんで、それに比べれば、有害性っていうのは大したことないって言って、これ裁判で負けたんですよ、これ、有名な話なんですけどね。だから、そういうふうな事例を世界でも見てくると、日本では差別っていうのが、もちろんありますけども、案外見えにくいですね。かえって外国の方が、差別が非常に露骨な形で見えてくる部分があって、それで私は、さっきみたいなちょっと偉そうなことを言ったんで、公害が起こって差別が起こるんじゃないくて、公害という社会の中での一つのマイナスの部分というのはどうしても弱いところに押し付けられる、差別のあるところに押し付けられる構造があるんじゃないかというふうに思ってたわけですよ、で、そういう話をしたんです。

ついでに言わせてもらえば、今度の原発事故なんかでも、やっぱり東京の真ん中には無かったわけですよ。過疎化して人口が減ってきている、そういうところに持ってきてるわけですから、そういう意味では、形は違うし、見え方も違うけども、やはり公害というものはそういう、私たちが意識しようとしまいと、この社会の中にあるひとつの差別の構造の中で発生するんだと思ってます、というふうにさっき申し上げたし、今もそういうふうに思って。ただ、それ気がつくのが、ちょっと私は遅かったですけどね。いいでしょうか、これで？

司会 後ろの方で手が挙がってる。どなたか、後ろの方。

感想 筑紫女学園大学短期大学部の中原千晶です。すいません、質問じゃなくて感想なんですけど、私は水俣出身で、小さいときから水俣病について勉強してきました。実際に水俣病の患者さんと交流したり、どんな体験をしたかなど話を聞いたことがありますが、きょうの講演会で、水俣病のことを詳しく調べていらっしゃる原田先生から話が聞けて、また違うことを伺いました。とてもいい体験ができたと思っています。ありがとうございました。

司会 他にご質問の方いらっしゃいますか？

原田 ちょっと今のに、水俣という名前を出すのが恥ずかしくて、名前を出さない時代っていうのがあったんですね、あなたのお父さんたちの時代ぐらい。しかし、今はむしろ水俣で環境問題っていうのはこんなに大事な問題なんで、しかもこんだけのいろんなことをやってんだって

うことを、むしろ表面に出して、世界の環境問題の原点にしていく、そういうふうな動きに少し今向かってきてってね。ただやっぱり半世紀前は、水俣っていうのは、みんな隠したんだ、名前はね。だから、今回は、名乗ってる。だから、それは非常に。ある意味勇気のあることだけど、しかし、今からはむしろ水俣っていうのが、広島、長崎と同じように、人類の一つの教訓として残っていくだろうという意味で、講演をしたいし、あなたたち若い人が頑張ってもらいたいというふうに思います。ちょっと今の追加ですね。

【司会】 どうぞ。

【質問4】 私、Tと申します。上天草出身でございます。私の昭和2年生まれの兄が、病名分からないままで何十年も寝込んで、そして、最期は骸骨のように、本当に、1人で病室へ入るのが怖いくらいに、骨と皮ばかりになってしまったけど、40代からでした。もう骨と皮ばかり、それから、目は白内障の手術を2回しました。そして、自分は痛風だ、痛風だって言ってたんですね。痛風で足が曲がって痛い、今思ったらこむら返りですけどね。足が痛いって言って、歩けなくて救急車で運ばれて入院したり、退院したりしてばかりおりましたけども、最期はもう、私たちも、何回も危篤、危篤って帰りました、福岡におりますけど。きょうだいみんなが帰ったら、もう本当に骸骨そのものでした。骸骨が寝てるのと同じでした。それでも病名が分からないで、痛風、痛風と、本人が言ってるんですよ、病院も何とも言いませんでしたけど。そのうち、私たちが帰って手足をさすってやると気持ちのよさそうにしていましたけど、もうほとんど、ニワトリが羽をむしった状態のように骨と皮ばかりなんですよ、それが40代から。73で亡くなりました。どうしても生きるんだと、本人は、おやじの年まで生きるんだと言ってましたけど、ほんとに父親と同じ73で亡くなりましたが。

トイレも立てない、兄嫁が救急車で、たまには帰りたいから家に連れて帰る、また救急車を呼んで病院に入れる。病院は分からないんですよ、本人は痛風と言うし原因は分からない。それで、おむつをはめさせると、おむつを嫌うんですね。それで、便器を横に置いてやると、便器の底まで尻がつくほどに痩せて、それこそ、鶏の羽をむしった状態でしたけど。平成14年の正月の3日に、誰にも、家族も正月に帰ってましたし、病院も、看護婦も居ないところで、1人亡くなってたんです。それで、警察問題になりましたけど、町立病院でしたから、そのまま泣き寝入りというか、そのまま亡くなりましたけど、今にして思ったら、御所浦沖の一番潮の流れの速いところで、父親と、兄と、弟と3人で車エビの網をしていました。それで、エビは大事な売り物ですから、私たちが食べるのは常にクッヅコとか、深海の底に住む魚ですね、そういうものを食べておりました。で、弟も、家族もみんなこむら返りをするんですよ。私ども、今、きょうだい生きてるものは、一応水俣病の認定を受けております。

そのときに、ここにおります、主人ですけれども、主人は小学校4年生から、水俣の三ツ島沖ですかね、先ほどの写真に出てましたけど、あの辺まで父親と2人で漁をしてたんです。先生には詳しく手紙を書いていますで、ここ省略しますがけれども、4年生から、夜中に釣りをして、明け方ほんの仮眠を取って学校に行っていましたから、ほとんど勉強できませんでした。それから中学

校を……。

【原田】 あのね。答えは書いてあげますから、ちょっと話をね。それで、質問は何ですか？

【質問4】 もう、先生に手紙を書いていますから。

【原田】 どこ、だいたい、上天草？

【質問4】 上天草、大道です、大道地区。

【原田】 大道、ああ。

【質問4】 龍ヶ岳。

【原田】 龍ヶ岳、巢みたいな所です。

【質問4】 龍ヶ岳。あそこが一番遅れてます。で、いろいろです。水俣の二の舞です、本当に。今聞きたいのは、その時代、2年生まれの兄が、とうとう病名も分からなくて死にましたけど、水俣病じゃなかったんだろうかということを質問したかった。

【原田】 それは、亡くなった人に対してちょっと僕は診断はできんけど、ただ場所と、それから、時代を考えればね、まあ、全部の病気がそうだったかどうかは別としても、少なくとも有機水銀の影響はあったでしょうね。あそこなら、とにかく……。

【質問4】 平成14年に亡くなってますから。

【原田】 平成14年なんだ。

【質問4】 はい。

【原田】 何で申請しなかったわけ？

【質問4】 平成14年の1月3日の正月に、73歳。

【原田】 平成14年っていうならもう、みんなが申請しよったころだもんね。

【質問4】 だけど、大道はありませんでしたもんね、一番遅かったんです。

【原田】 大道はいっぱいおるよ、患者さん。

【質問4】 はい。町立病院ができてからですね。病院が受け付けないんですよ。

【原田】 そういう時代があったけど、しかし、40年っていうのは……。他の人のちょっと興味がこうね、ローカルな話になったんで分かりにくいと思うんですけど。要するに、今おっしゃってるところは、水俣の対岸の御所浦の、またちょっと裏側になるわけです。だから、あれから外されてるんですよ。だから、指定地区から外されてんですよ。そんなばかなこと無いですよ。おんなじ海なんですよ。だけど、省かれてるんですね。龍ヶ岳とか、それから、鹿児島では長島なんていう島は不知火海側、島の半分ですよ。島の真真中に線引いて、不知火海側は指定地区で、島の反対側は非指定地区なんて、そんなばかなことはあり得ないんですけどね。そういう状況なんです。またちゃんと調べてお返事します。

【質問4】 先生に、詳しく、私、手紙書いてますんで。

【原田】 ただ亡くなった人は、今の状況ではもうほんとにどうしようもないね。一生懸命ね、例えば、川本輝夫さんっていうのがあって、おやじさんが間違いない水俣病で、それで、カルテも残ってても、結局制度的には、亡くなった人は、要するに、審査会にかけない。だから、亡くなっ

た人は、もし何かしようとするなら、直接、実に裁判をするかなんかしかないというのが、今の状況ですね。

【質問4】 そうですね。結局、警察問題になりましたけど、町立病院ですから……。

【司会】 あ、すみません、この辺りで止めていただいていいですか？

【質問4】 すみません。

【司会】 ほぼ時間ですけど、もし、どうしてもご質問ありましたら、1つだけ短い質問でしたら受け付けます。ございますか？それでは、今日はたくさんの方においでいただいて、「水俣学のとびら」という講演会を無事に終えることができました。どうもありがとうございます。そして、原田先生に大きな拍手を。これで講演会を終了します。ありがとうございました。

(録音終了)

【付記】

本講演会は本学の生涯学習助成費を受けて開催した。なお、この報告書は講演会の音声反訳を有限会社 SohoNet2030に依頼したものを現代教養学科の速水良晃が整理・編集して制作した。

追記

2012年6月11日に原田正純先生（77歳）が急性骨髄性白血病のため、お亡くなりになりました。いろんな病気を抱えておられましたが、ちょうど1年くらい前の本講演会での温かい落ち着いたお話振りから、まだまだご活躍いただけたらと思っていました。ご逝去なさる2週間くらい前に、本講演録についてご自宅へお電話し、奥様からご体調が良くないことはお聞きしましたが、質疑応答の際の質問者名を仮名にすることなど幾つかの検討事項について、奥様を通してお答えいただいたので、そのようなご病状が悪化していたとは気付きませんでした。15年くらい前に知人が同じ病気で亡くなりましたが、見舞いに行って大変厳しい病気だということを知りました。原田先生もおそらく随分きつかったことだと思いますが、丁寧に対応していただいたことに感謝しつつ、心から哀悼の意を表します。

(はやみ よしてる：現代教養学科 教授)